

## 令和3年度第1回放課後子どもプラン運営委員会会議録

日 時 4月23日(金) 午前10時から11時10分

場 所 801会議室

出席者 大熊教育長、藤本生涯学習部長、

浦野委員長、前田副委員長、志波委員、多田委員、大久保委員、並木委員、宝妻委員、

関生涯学習課長

伊藤コーディネーター、成田コーディネーター、森田コーディネーター、吉田コーディネーター

鈴木生涯学習係主任

欠席者 石原委員、佐藤委員、後藤委員、菊池図書館長、鈴木公民館長、鈴木庶務課長、加藤指導室長、鈴木児童青少年課長、富田子育て支援課長

(内部委員及びコーディネーターについては、新型コロナウイルス感染症対策による会議室使用人数の削減のため出席者を制限))

傍聴者 2名

### 1 開 会

- (1) 小金井市放課後子どもプラン運営委員の委嘱状交付及び任命

任期：令和3年4月23日～令和4年3月31日

出席者自己紹介

- (2) 教育長挨拶

日頃より小金井市放課後子どもプラン運営委員会で様々なお議論をいただきまして誠にありがとうございます。コーディネーターの皆さんも子どもたちの放課後のことについて常日頃からご尽力いただきまして誠にありがとうございました。今後も様々な点でお力をお借りしなければならないと思います。どうかよろしくお願いいたします。

今回少しお話をさせていただきたいことは、小金井の教育の未来と放課後子ども教室という形で、お話をさせていただきたいと思います。気になっていることがいくつかありまして、データから読み解く最近の子どもの課題ということで、これを見てください。これは小中学校の不登校の数でございます。最近第一波とか第二波とかという言い方をするのですが、完璧に不登校の第二波になっていて、急激に増えていることがわかります。これともう一つ危惧しているのは、小中学生、高校生の自殺の数です。昨年度の数が、これも最近よく耳にする言葉ですが、同一の月が全て前年度の月を上回る、最近は同じ曜日の東京都の感染者数を見てみると前の週を14日連続で上回ったという話があります。あれと同じよ

うに去年6月から毎月、前の年を上回る自殺をする子どもが増えている。これはどうかしたらいいかわからないのですが、6月というのは学校が始まってからですね、いわゆる去年は5月まで学校が閉じられていたのですが、学校が始まってから、自殺する子が多くなってしまったというのが事実です。なんでこんなことが起きているのかというのは、専門家にその原因を探っていただくこともあるのですが、その一つにですね、親は集団で助け合って子育てをする、つまり最近また後で話がでますが、いわゆる核家族だけではなくて、悪いと言っているわけではないのですが、ご両親とも仕事に出られるようになって子どもが一人で放課後を過ごすということになっているのですが、それより大事な点は、周りの人たちと関わり合いながら子育てをすることが本来の姿であるけれども、なかなか親同士の関わりが希薄になっているものですから、集団で子育てをするということがうまくいかなくなっているのかなと。それから子どもも関わり合いながら成長するのですが、どうしても最近そういう関わりが少なくなっているのが一つの原因ではないかなと考えています。つまり自殺も不登校もだれも僕のつらさをわかってくれないというような孤立化が進んでいるのではないかなというのが一つ。仮設でございます。皆さんはどうお考えになるでしょうか。様々にあると思うのですが、一つの原因としてこれは上げられるのではないかなと思います。

さらに危惧すること、スマホが発売されて今年で14年目になるそうです。この14年間、いまだかつてなかったくらい子どもの生活が大きく様変わりしました。大人の生活も様変わりしました。電車の中で、夕刊紙を見ている帰りのサラリーマンはほとんどいなくなり、みんなスマホでゲームをやっているかニュースを見ているかという状況になりました。そういう意味では、デジタルネイティブと言われるのですが、デジタルネイティブというのは、この言葉は1995年、ウィンドウズ95が発売された時から言われているのですが、スマホが発売されてからは言葉ができていないので、一応新デジタルネイティブという名前を付けました。スマホが発売されてから、コンピューターが世の中に一般化するより、スマホが発売されたときの方が、社会が大きく変わったのではないかなと思います。特に、子どもたちの様子を観察すると、こんないろんな違いがでてきているのではないかなという気がします。私の小さいころ兄弟が多かったものですから、けんかの種はたいがいテレビのチャンネル争いでした。今女房と二人暮らしをしていますけど、女房とチャンネル争いをすることはありません。どっちかが別の部屋にいけばいいだけです。今の子どもたちはもっとですよ。テレビ見ないです。自分の好きなユーチューブとかティックトックを見ています。考えないで調べるとか二極化とかいろんなことがでてくると思うのですが、そういうふうにな

って、小学校のときになりたい職業を見てください。これ、2位と4位がユーチューバーですね。ユーチューバーって何って言われるかもしれないですけど、ユーチューブを出してお金を稼ぐ人ですね。すごく稼ぐそうです。10年前調べてみたらこんなのです。そんな数字は全然ないですね。この10年間大きく変わったというのが、目の当たりにできるのではないかなと思います。後ですね、半分以上の塾が個別指導塾に変わっていています。個別指導塾って面白いのですね。手上げるのですね。そうすると、学生さんが隣に来てくれてこれはこうだよと教えてくれるのだそうです。中学校に行って子どもでちょっと集中力が欠けている子がいたので、どうしたと声をかけたら、今聞いてなくてもいいんだ。塾で教えてくれるから。手あげればいいのですから。それからわからなかったら、動画を見ればわかるようになっていて、学校の授業を聞いていなくてもなんとなくわかる。そういうことになっちゃっているのですよ。これをまとめてみると、がまんする経験であるとか、よく考え抜くという経験が、急速に少なくなっている。いわゆる新デジタルネイティブの子どもたちは、そういう生活環境になれているのではないかなということが大変危惧されるわけです。ということはどういうことかということ、子どもたちは小さいころ崖を登って、達成感を感じていたのに、つまり問題を一つ解く、算数の問題を一つ解くにしても、そんなに助けてくれる人がいたわけではないので、非常に苦労して崖を登っていった。それには達成感があっただろう。遊ぶ時も同じですよ。友達同士の意見を交換しながらというか、戦い合いながら、それこそ大変な話し合いを通してですね、遊ぶ内容を決めて、ルールも自分たちで決めて、楽しむっていうのはまさに高い崖だっただろうと。今の子どもたちはそういうことの友達との関わりは少なくなり、勉強もわからなかったらウィキペディアに聞けばいい、先生に聞けばいい、塾に行って聞けばいい、ということになるとですね、崖どころか、スロープになっちゃっている。スロープを登った時に達成感感じられるかということ、感じられないですよ。ということは、自分に力があるということを実感するっていうこともなくなっているだろう。崖のぼりに重要だったのは実は一人ではできなくて友達との協力が何より大事ということだったと思うので、友達の協力もなくなっているんで、関わる良さを実感できない。まさに孤立化が進んでいるということがここでもでてきてしまっている。

先ほども少し話しましたがけれど、共働き世帯数がどんどん増えていって、逆転してもう10年経ってしまったわけです。こういう状況になったときに、我々はどうやってこの子どもたちの居場所を確保するかというのを真剣に考えなければいけない時期に来ているように思います。まさに潮目が変わった。今までの関わりでは、子どもの今に関われないという状況が生まれているのではないかなと思

います。つまり、潮目が変わったというのは、僕も釣りをやるのですが、潮目が変わったから場所を移動しますって船頭さんいうのですよね。つまり潮目が変わったら同じ場所では魚が釣れなくなるので、別の場所に移動するわけです。つまり子どもの潮目が変わった以上、これまでの関わり方で一人一人の子どもに未来を自分らしく生きていく力をつけることができるかということ、非常に苦しくなってくる。言い訳がきかないというか、非常に難しくなっているのではないかなと。そういう時に、子どもの放課後の充実は本当に大切なところで、先ほど言った、友達との関わり合いであるとか、友達と関わって何をするか決める場所であったり、本当に大切に、学校も今努力はしているのですが、学校だけではなくて、学校も変わってくれと、同じように校長会に言っているのです。学校が変わるだけでは十分ではなくて、放課後の充実、全ての場所で、家庭も、この潮目が変わったことを理解してくれる、学童も同じだと、こんなことを言ったらすぐ怒られるかもしれないけど、いつまでもいつまでもけん玉をできることが良しとしているっていうような、少しずつ考えなければだめだろう。放課後子ども教室も同じです。学校も同じです。塾にも変わってくれ。それからスポーツを教えるところにも変わってくれ。教え込みのスポーツはもうないです。芸術もできるようになることより、一人一人の自分らしさを発揮できる、そういう教室に変わっていったらいい。現代の子どもに則した新しい教育を、全ての場所が新しくつくりなおさなきゃいけないという時期に来ているのではないかなと思うのです。スポーツも変わってほしいと思っているのは、厳しい指導が良しとされている現状があって、これ本当にいいのかいというところが、今までだったら子どもががまんしていたのですが、がまんすることをあまり知らなくなった子どもたちは今までの厳しい指導は通用しなくなっています。いろいろありますが、とにかく様々なところで、潮目が変わった子どもたちに適した指導をしていかなければならないと考えます。

この潮目が変わった子どもたちの放課後のあり方をしっかりと子どもが変わったことを意識していただいて、今までのやり方を考えていただきたいというのが今日の僕の主旨です。もう一度いいますが、一人一人の子どもに未来を自分らしく生きる力をつけるために、主体的で豊かな学びの場になってほしいということです。このことを目標にして、皆さんに意見を言っていただきながら、放課後子どもについて考えていかなければいけないと思うのですが、この後はちょっとこんなことをやったらどうですかという提案をさせていただきます。まず一つは、これを実現するためには、僕らが期待していることをできるようになる子どもだけではなくて、答えのない問いに挑戦ができる、自ら主体的に考える力をつけるということが重要だろうというふうに思っています。そのためにも、一つ

はこれ例です。全・全日開催に向けて、放課後子どもを充実させる必要があるだろう。全・全日開催とは授業が終わったらすぐに行ける。全日とは原則月曜日から金曜日で、親御さんの参加をいっぱい促すようなときには、土日開催も可能とするということも一つ必要になってくるのではないか。場としてです。

それから豊かな関わりが促進される新しい自分を発見できる校庭開放。どういふことかという、今の子供たちは異年齢での遊びをあまりうまくできない子どもが多くなっている、そういう子どもたちの関わりを増やしてあげる。ただの見守りではなくて、異年齢の子どもたちを関わらせる仲人になってあげるような関わりが必要ではないか。でその時にお姉ちゃんが小さな子をめんどろ見るといふことができ、えらいねえとほめられたときに、一つの新しい自分が発見できるんじゃないか。そんなことを思いました。

それから、子どもが学びたいがある放課後子ども教室。さっきのこれができるようになればいいということだけではなくて、子どもが学びたい、どんなのが今学びたいですかね。運動もあるでしょうし、英語なんかも学びたいがあるでしょうし、後何があるかな。よくわからないのですが、私どもが教える内容があるのではなくて、子どもの学びたいがある放課後子ども教室ということ考えていただきたい。

それから、孤立感が進んでいる子どもたちには、話を聞いてもらいたいとか、誰かと一緒にいたいとかまったりしたいとか、安心感のあふれる居場所の確保も必要だろうと思っています。これは、小学校のみならず、中学校でも重要な視点ではないかなと考えておりますので、今後委員会でも中学校で、どのような居場所があったらいいかというのを考えていただきたいというふうに考えております。

このようなことをしっかりやっていくためには放課後子ども教室だけでやるわけではいけないので、小金井版コミュニティースクールというのをつくって、放課後子ども教室、地域行事、学童、それから学校の中の学習内容を含めて一貫性のある教育を推進できたらいいかなと思っています、今後強力にこのことを進めていきたいと思っています。

そういうことを踏まえて、皆さんのお知恵を拝借して、孤立化が進む子どもたち、そしてがまんしない、友達と関わるのが少なくなっている子どもたちに、このままでいくと大変なことになると思いますので、先を見越してですね、どういふ事があったらいいか皆さんの知恵をおかりしたいというところです。

教育委員会でこないだお話をさせていただいたのですが、空、雨、傘という、足元ばかり見て自分のやっていることだけをやっているのではなくて、空を見てください。そしたらもしかしたら、雨雲が近づいているかもしれません。そう

したら傘を準備しましょう。子どもたちの孤立化が進んでいて、がまんしない子どもたちがいっぱいいたときの未来を見てみると、これはちょっと暗雲立ち込めるのではないかなと見える。そうしたら、傘をさしてあげようよ。つまり何か新しい施策をともに考えていくことが大事なのではないかなというようなことで最後話を終わらしていただきたいと思います。今お示ししたことは、案でございます。皆さんが主体的にこれからの放課後子どもをどうやっていくべきかということを考えていただければということで、どうかよろしくお願いいたします。以上です。ありがとうございました。

## 2 議事

### (1) 小金井市放課後子どもプラン運営委員会委員長及び副委員長の選出

運営委員長は浦野委員、副委員長は前田委員が選任された。

**【委員長】**先ほど教育長の方から、放課後子ども教室についてのご発言がございました。この運営委員会については、皆さんご存じだと思いますけど、新放課後子ども総合プランについて話し合う運営委員会ですので、今まで通り、皆さんとプランを推進するために、どういうふうにしたらいいか。具体的に言えば、課題や今までの検証、良かった点などを皆さんと情報共有しながら、進めていきたいと思っています。何も決まらない運営委員会だねと聞きますけど。この運営委員会の役割は推進する上での課題や問題点、そして今まで上げてきた実績の検証、そういったことを皆さんと共有する場だと思います。その共有したものが市政に反映されていくものだと私は理解していますので、その点について皆さんと共通認識で、この一年間やっていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。それと最後になりますけれども、令和2年まで長きにわたりこの運営委員会を引っ張ってくださった田中前委員長に対して、謝意を表明したいと思います。ありがとうございました。これからもどうぞ皆さんよろしくお願いいたします。

**【副委員長】**ご存じの方もいらっしゃると思いますが、PTA联合会の方からこの委員会の方に出向させていただいております。放課後には結構関わりが4年、5年、子どもが1年生に入った時からお世話になっています。そういった関係で、この委員も3年前から関わらせていただきまして、いろいろとご協力いただいておりますので、こちらで私も今度、逆に支える側に入りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**【委員長】**司会につきましては、今後前田副委員長にお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

### (2) 放課後子ども教室について

**【事務局】**昨年度は、2学期以降感染症対策を行い、感染リスクを減らした上で、再開できる学校から開催しておりました。その後感染者数が増加し緊急事態宣言の発令

もあり、3学期の始めから開催中止といたしました。3月の緊急事態宣言の解除後、学校によっては数回開催をいたしました。

よって、令和2年度の実績ですが、資料2の左側の表のとおり全校で281回の開催となりました。令和元年度の開催回数が837回でしたので、かなり減少してしまいましたが、これは新型コロナウイルスの影響で実質三か月ぐらいしか開催することができなかったことによるものです。

右側の令和3年度の予算ですが、各校合計で1200回を超える実施回数を予定した予算となっています。放課後子ども教室運営委託料が昨年度の予算額1,570万5千円から2,176万6千円となっております。これは、学習アドバイザーと放課後子どもサポーターの謝金単価がそれぞれ100円上がり、それぞれ1,100円、1,000円となったことや、校庭と体育館を学童及び放課後子ども教室に優先的に使えることになったことによる開催増を見込んだことから、増額となっております。

しかし、今年度も、新型コロナウイルスの学校における感染及びその拡大のリスクを回避するため開催を中止することもあるかもしれませんが、できる限りの安全対策を取りながら行っていきます。

**【副委員長】**直接この放課後子ども教室に関わる話ではないのですが、世の中の子どもの潮目が変わったというところについて、小金井はあまりトラブルというか大きな問題はほとんど起きてないと思うのですが、中高生の犯罪件数、都内の渋谷区で警察の方とお話しますと、先日も高校生6名が大麻所持使用で検挙されています。高校生がそういったところまで、もう近づいてしまっている、そういう繁華街の区だからそういうことなのかもしれないのですが、それが小学校、中学校、高校生という形でつながっている中で、やはり子どもたちの安全な居場所を確保するのは大変重要ではないかと思います。都心で起きてますので、まだこちらには流れてはいませんけれども、そういった悪い方向に進ませないためにも、小学校、中学校の時の放課後子どものあり方が大変重要ではないかなと考えています。

**【外部委員】**先程教育長からお話がありましたけれど、外に出て一生懸命野球をやったり、サッカーやったり活発に活動する子もいるのですが、逆にこういう状況の中でどんどん家の中に閉じこもりがちになってしまう。それはまさに教育長が言われたように、人と人の繋がりがだんだん希薄になってきて、そういう繋がりを求めようとしない子が多くなってきているのではないかと思う。そういう子どもたちをどうやって社会の中にひっぱりだして、みんなと一緒にわいわいやっていけるか、そういう閉じこもっているところにこそ、大きな問題がこれから生じてくるのではないかなとそういう危惧をしているんですが、ここにおられる皆様方、子供たちといろいろな関わりがある方ばかりですので、そうい

う普段からも繋がりが無い、あるいはもしかすると保護者の方もあまり周りに相談したりとしない、そういう引きこもりまではいかないけれども、閉じこもりがちな子どもたち、大人たちをどうやって地域の中へ、社会の中へ、引っ張り出していくかというのが、大きな課題だろうと思うのです。小金井でそういうような雰囲気があるのか、強いのか弱いのかその辺が私もよくわかりませんが、雰囲気としては二極化しているというふうに私も感じております。子どもたち大人たちをどうやって引っ張り出していくか、答えがないものですから、どうやっていったらいいのだろうかあとというだけでおしまいです。

**【教育長】**まさにそのとおりだと思っています。どういうふうにとったらいいかということも、新しいアイデアが教育委員会としてあるわけでもございません。先ほどやった内容を案として示させていただきました。この中で今、そういうことを本格的にやろうとしているときに、お父さんたちに出てきてもらわなければいけないとか。いろいろ考えると、放課後子どもの域を超えてしまうかもしれないけど、何らかの形で、地域と一体となって土日開催のイベントがあって、それに出てきた子どもが、放課後子どもに行くとか、何か閉じこもっている子どもをとんとんと肩をたたいてあげるような、何らかのことをやっていかないと、難しいかなという気はしております。どうやればいいかという答えが自分自身わからないですけど。とにかく雨雲が近づいてきているということだけは確かなことだと思いますので、ここに対してどう私どもが、考えたらいいのか、皆さんのアイデアをぜひとも出していただきながら、いち早くこういうことに関して、適切に手を打って、進めていっていただきたいなあと、まだ思いだけなので、本当に申し訳ないんですけど、活発なご意見をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

**【外部委員】**今放課後子ども教室は、感染症対策ということで、自校の児童に限り校庭で遊んでいい。例えば、二小の場合はそのようにさせていただいております。本来であれば、就学前の児童を連れて来て、一緒に遊びたいというようなことがあります。今お断りしているのが、感染症対策のためではあるんですけど、そういった方が入ってこれない。あと、例えば、学校なんですけど、学区域で、本来二小の学区域ではないところから、違う学区域の学校に行けるようになってきていることもあって、そうすると、地域の子どもと、自分の学校ではないところで遊びたいというような、そういう気持ちもあるかと思うんですけど、そういう事に対して、今どうしても学校に、協力していただいている関係で、なかなかそういうふうな、他の学校の子の受入れというのが、難しくなっている。自由な行き来の部分のことを、どのように考えていくかをこの場で考えていけたらいいなと思っている。

もう一つなのですが、ずっと置き去りにされている中学校の問題。先ほど教育長も言われたのですが、小学生だけじゃなくて、中学生の居場所をというものがありません。今年度予算表に現れているのは、とりあえず小学校の予算、あと中学校に関しては、一部の今実施されているところの予算しかのっていないのですが、やはりいつまでたっても、ち中学校の事業をきちんとやっていくという形にしないと、なかなか全体的な広がりにはならないと思っています。どのように考えているかを教えていただきたい。

**【教育長】** おっしゃるとおり認識していて、それは教育委員会で答えをもっているわけではないので、皆さんの活発なご意見で、新しい放課後子どもをつくっていただきたいと思っています。それともう一つは、いわゆる得意技をもっている方がいるのですが、ある学校のやり方と他の学校のやり方が違うので、講師の先生が移動できないという問題があって、今日はこっちでやるけど、次の時はこっちでやるってというような、指導員がどこに行っても同じようなシステムがあるということも大事な点。子どもだけじゃなくて、このことも検討していただければと思います。

**【副委員長】** いずれにしても、簡単にはいかないような内容かと思っています。

**【委員長】** 今日は、コンパクトにしなくてはいけないので、この問題については、また次回ということで、昨年度の第一回目ときの議事録を読んでいただければ、分かると思いますが、中学校問題については、内部委員の方から一定の見解を出していただいておりますので、それをまた、皆さん読んでいただきたいなと思っています。以上です。

**【コーディネーター】** 今放課後子ども教室の週五日を目標に、都から出されている新放課後子どもプランの中に入っているんで、そこを集中してやっていこうということで、かなり皆さん無理をして、学校との調整ですとか、他の団体との調整をして、やっている感じです。今土日のお話がでたのですが、呼び込むための土日開催というのが、果たしてちょっと放課後子ども教室に則しているかどうかというのが個人的に疑問なのが一つと、教育長直属の何かそういう組織というの作るという方向性はありなのかしら。例えば教育長がそういうことを招集する何か交流部を作られるとか、そういうこともいかがなと思ったのですけど。

**【教育長】** すみません。先ほどのやつは僕の案でして、皆さんに検討していただくときに何もないと困るかなと思って出させていただいたものですので、それを土台に考えていただければ良いということで、出していただきたいなと思っています。先ほどの子どもたちが閉じこもっていて、なかなか来ない子どもたちに同じような形で、来てくれというだけでは、なかなか来ないだろうと思ったわけで、そう

いう時には、何か呼び込むためのイベントもあつたらいいんじゃないかなということで、考えたところなので、やってほしいとか、やんなきゃ困るということではないのですが、ただ閉じこもっている子どもたちにどうやって出てきてもらえるかということはそれぞれ考えていただきたい。課題だけは共有していただきたいのですが、方法論は皆さんで考えていただきたい。というふうに僕は思っています。それから、直属の何かをやるのは新しいアイデアですので、ちょっと検討させていただきたいと思っておりますが、僕は何しろ子どもが主体ということ考えたときに、地域の人たちも主体じゃなきゃいけないと思っております。そういう事で、教育委員会としてこれやってくれっていう指示をだしたわけではなくて、最初の部分は事実として話させていただいて、最後の部分はアイデアと区別してご理解していただきたいと思っております。

**【委員長】** 今日、コーディネーターさん全員は出ていらっしゃらないので、教育長もお忙しいと思っておりますけど、是非一度、教育長とコーディネーターさんのディスカッション、情報交換をできる場を設けたいと思っておりますので、それについてはご検討いただきたいと思っております。

**【教育長】** どういうふうに関わつたらいいか、どういうふうに言葉かけをしたらいいか、今までと全く違うと思うのです。その辺のところを、やっぱり学校も変わらなきゃいけないし、学童も変わらなくちゃいけないし、放課後子どもも変わらなくちゃいけない時に、こうやったら良いということはなかなかなくて、皆さんと一緒にどうやったら良いか考えていくという、まさに答えのない問題に突入するってことだと思います。その時に、今までこうやってきたから、これで進みましょうだけはないかなと思います。今の子どもたちの課題をどう解決するかということで、皆さんでアイデアをだして、その一つ一つが、まさに放課後子どもの充実という観点でいうと、新しい第一歩を踏み出すことになるのではないかなと思っております。

**【外部委員】** お願いしたいことがあるのですが、コーディネーターとのディスカッションのほかに、放課後子ども教室のスタッフ全員に向けて、子どもに接するときの、心構えとか、そういうものを何かビデオにさせていただいて、みんなでそういうものを共有できるようにしていただくと、ありがたいと思っておりますがいかがでしょうか。

**【教育長】** ビジャレアルの佐伯さんという人が、世界で初めてスペインのサッカーチームの監督さんになられて、教えないスキルということで、新しい子どもたちとのかかわりを構築されている方です。学校も変わらなくちゃいけないということで、じつは管理職中心に、その方とズームでつながって話を聞くことになっていて、そういう新しい子どもとの関わりみたいなものをビデオにとっておきますの

で、皆さんにも是非、見ていただければと思います。

**【コーディネーター】** 確認させていただきたいのですが、この運営委員会の場で、コーディネーターの発言権についてですが、どのように理解してよろしいでしょうか。オブザーバーということで私たちは参加させていただいています。先ほどから拝聴していると、運営委員として、市子連の方から出ていらっしゃる大久保委員が、コーディネーターとしての発言をされています。コーディネーターとしての発言というのは、大久保委員と私たちと区別されていると思いますが、どのようにここで整理してよいか。

**【委員長】** 要綱を見ていただければわかると思いますが、コーディネーターは運営委員会に参加できます。ただ発言に関しては、必要なときに発言できると明記されています。

**【コーディネーター】** ということは、コーディネーターとして、発言を求められたときのみ、発言できるということでしょうか。

**【委員長】** そういうふうに理解しております。

**【コーディネーター】** まず、運営委員の皆様にお礼があります。今までこのようなお願いをしたことはないのですが、この放課後子ども教室をぜひ、見て現場で感じていただきたいと思います。やはりそれは、先ほど教育長のスライドショーの中にもありましたけれど、学校間格差というのがあります。資料の方に昨年度の実績が出ていますが、開催日数に対する子どもたちの参加人数、ここも大きな差があります。その違いというのは何なのか、学校の環境なのか、校庭の在り方なのか、教室の開催の仕方なのか、実施場所に問題があるのか。そういうことを細かく検討していくことで、先ほど、今まで以上の子どもたちを呼び込む、そういう方策の方へ転換していくのであれば、やはりそのところの検証が必要になってくるかと思っています。今までは一人でも、二人でも参加者がいれば、その子のためにやるという、そういう公的な立場での開催というのを主に置ってきたと思います。ですが、これから先、コロナ禍でより多くの子どもたちを呼び込むということを考えたときには、やはり人数の差の課題というものを検証していくことも大事なかなと思います。そのためにコーディネーターの立場だけではなく、運営委員会の皆様にも、学校の状況をよくご覧になっていただいて、その上で、いろんなことを一緒に考えていただいて、さらにアドバイスいただきたいと思います。

**【副委員長】** 学校への来訪については、市の委員会ということで行く形になると思いますが、その場合も対応の方法として、生涯学習課で。

**【内部委員】** そうですね。やはり現場を見ていただくということは、必要だと思っ  
ていまして、実際、各学校によってだいぶ違いますので、コロナ禍でどうやって学

校を訪問するかという別の問題がありますが、事務局として調整させていただきたいと思います。

### 3 その他

**【内部委員】** オリンピック聖火リレーの交通規制（案）を説明。

**【コーディネーター】**先日低学年の保護者会があり、校庭で見守りをしていたところ、いい天気にもかかわらず、折り紙を持ってきたり、宿題を持ってきたりする子がいました。求めているのは、たぶん校庭で走り回って遊んでいる子ですが、折り紙や宿題をしたい、そういう子もいることをすごく感じまして、先ほど教育長が言われたように、家にひきこもっている子たちを引き出すためには、いろんな環境が必要だなとすごく思いました。今後我々が活動していくに当たって、その分人と場所と予算がかかりますが、こちらの見守りが多ければ多いほど、どこかにそういう場所も作ってあげたいと思います。そういうことも考えていきながら、行ってきたいので、ぜひ見ていただいて、ご協力をいただきたいと思います。

**【事務局】** 前回令和2年度第2回の会議録の確認をお願いします。

**【委員長】** これをもちまして第1回の運営委員会を終了させていただきます。